
魔法使いに天罰を

安藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いに天罰を

【Nコード】

N9882U

【作者名】

安藤

【あらすじ】

これは、神の右席、前方のヴェントの能力を手に入れた転生者のモノガタリ。

（前書き）

なんとなく書いてみた。後悔は無い。

その男は、転生者だ。

死ぬまでの過程^{プロセス}。死んでからの過程^{プロセス}は必要ないだろう。

その男の持つ能力は、かの『神の右席』、『前方のヴェント』の『天罰術式』だった。

肉体を天使に近づけ、『神の薬^{ラファエル}』の能力を使つての術式。

おかげで普通の魔法、魔術は使えない。

ある程度調整されていれば使う事は可能だが。

その男が、とある世界の大戦の時代へと乗り込んだ

「……一体、誰がやつたんだ」

その光景は異常だった。

赤い髪の男、ナギ・スプリングフィールド率いる『紅き翼』は、戦争の真っ只中で呆然としていた。

理由は簡単だ。

戦争をしている筈の者達が、一人の例外も無く、気絶していた。

一人一人を調べるも、怪我はあっても異常は見当たらない。

異常で、不思議で、意味の分からない状態だった

「どういうことだ？ こんなまねができる奴なんていんのか？
…」

大柄の男、ジャック・ラカンが呟く。

「……一人だけ、心当たりがあります」

「ん？ 知ってるのか？ アル」

赤髪の少年は、白いローブを着た黒髪の男、アルビレオ・イマに問う。

「最近、紛争地域に現れては誰ひとりとして傷つけず、無力化させている者がいるそうです」

「傷つけずに？ 一体どうやればそんな真似が出来るんだ？」

「分かりません。ですが、目覚めた人から話を聞けば、『敵意を持った瞬間、既に意識は無くなっていた』そうです」

その言葉に、全員が絶句する。

「『敵意を持った瞬間に意識を無くす』……？ そんな事が、可能なのか？」

「いや、恐らく魔法では無理じゃろうな」

「ならどうなんだよ。魔法以外でこんな事ができる訳が……」

「魔術さ」

バツ、と。

一斉に戦闘態勢を取る。

アーティファクトを取り出し、警戒心を強める。

あくまでも警戒心、敵意も悪意も持っていない。

「おっと、そんな警戒するなよ。しかし驚いた。まだ残ってたのかよ。殲滅したと思ってたんだがな」

ジャラ、と舌に付けられた十字架のピアスが垂れる。

金髪、攻撃的な眼、舌と両耳に付けられた十字架のピアス、高い身長、全身黄色の服、手に持ったハンマー。

特徴は幾らでもある。

まるで嫌悪される事を望んでいるかのような格好。

そして、敵意を誘発する様に、悪意を自分に対して持つようにしようとするかの如き話し方。

人をバカにする話し方、と言った方が分かりやすいだろう。

「魔術、だと？ そんなもんがあんのかよ！」

「あるさ、魔法とは違う神秘の力。其処の小さいのは知ってたみたいだがな」

ナギは小さいのと言われた少年、フィリウス・ゼクトの方を向く。

「お師匠、本当か？」

「昔の術だと聞いたんじゃないの。まさか使っておる者がいるとはな」

「魔法よりよほど便利だぜ？ ムニヤムニヤ呪文唱えなくていいしな」

ハハハ、と馬鹿にした様に男は笑う。

「あなた……名は、なんと？」

「あん？ 名前、名前ね。チッ、考えて無かったな。……そうだな、ヴェント。『前方のヴェント』とでも呼んでくれや」

そして、ヴェントは手に持ったハンマーを振り、攻撃する。

それを簡単に避け、『紅き翼』は戦闘態勢を取る。

「倒してどうやったか全部白状させて、や……」

ドサツ。簡単に、何の前触れも無く、『紅き翼』は全滅した。

全滅した、と言つのはおかしいか。全員気絶したのだから、無力化した、と言つべきだろう。

「……ふん。こんなものか」

そして、ヴェントは姿を消した。

そして、術式が解かれ、気絶していた者達が目覚める。

「クソッ！ 一体どうなってる!?!」

「落ち着け、鳥頭」

「だが……」

「ナギ」

うつ、とつまり、何も言い返せなくなる。

金髪の女性、アリカがナギを抑えつけ、アルが話し始める。

「あの男は、自分の事を『前方のヴェント』と名乗っていました。ゼクト、あなたは何か心当たりは？」

「いや、魔術は専門外じゃし、よくは分かん」

「そうですか。では、少なくとも対策を練るまではあの男と戦うのはやめておいた方が良さそうですね」

「ならよ、あいつは『敵意を持ったら気絶』すんだろ？　なら敵意を持たなきゃ良いじゃねーか」

「アホ、敵意を持たずにどうやって戦うんだ？」

詠春に突っこまれ、あ、と間拔けな声を出し、がっくりとうなだれる。

どんな力なのか、全く持って分からない。

回復魔法でも回復させる事は出来なかったらしい。

それでも、自分達が回復できたのは何故か分からない。

自分たちを襲った、というか無力化させた男は、既に全世界へとその顔を知られている。

「……なあ、思っただけどさ」

「んだあ？ どうしたよ、ナギ」

「あいつさ、何で俺ら殺さなかったんだろっな」

それは、一つの疑問。

戦争で、無力化出来るなら、自分の顔を知られる前に殺すのもありえただろう。

「殺すどころか無傷。それも、もしかしたらまほ……魔術を解いて意識を回復させた可能性だってあるんだろ？ なら、狙われるだけじゃねーの？」

「……まさか」

「お主も思ったか、アル」

「ええ、ですが、それはあまりにも出鱈目過ぎる……」

「可能性が無いと言い切れんのがまた痛いっの」

「おい、一体何の話だよ」

アルとゼクト以外の者は何を言っているのか分からない、と言った顔だった。

「恐らく、これは予定通りなのでしょう」

「予定通り？ 顔をばらすのが、か？」

「ええ、あの時、私達は戦場へ行き、あの男に会いました。ですが、態々姿を見せる必要は無かった筈です。本当に何の呪文も唱えていないとしても、何かカラクリがある筈なんですよ」

「まどろっこしいな、ハッキリ言えよ」

アルは一拍置き、話す。

「彼は我々が彼の、ヴェントの顔を知り、ヴェントに敵意を抱いた者を問答無用で気絶させる事が出来るのではないのでしょうか？」

全員が絶句する。

確かに、それなら顔が全世界へと流れた現状を説明できる。

敵意を持った者を問答無用で気絶させると言うならば。

顔を知っている必要があると言うのなら。

既に、魔法世界のほぼ全ての者達はその術の射程範囲に居ると言う事。

「顔を知らなければ、敵意を持たなければ射程範囲外と言う可能性として、推測でしかありません。ですが、可能性は高いでしょう」

仮にそれが出来ると言うのなら、一人で魔法世界を制圧する事さえ可能だろう。

ふざけている。理不尽にも程がある。

「ありえねえ……敵意を持ったら気絶なんて……」

「ですが、逆に言えば彼一人で戦争を終わらせることも可能です」
そして、物語は加速する

「君は脅威だ。敵意を持てば無力化される。だが、感情の無い僕らならその術は効かないよ」

白い髪の少年は詠唱をし、巨大な石柱をぶつけようとする。

「確かに俺の一番強力なカードはコレだがな。別にコレしか無いって訳でもねえのよ」

全長四十メートルはあろうかと言う氷の帆船が現れた。

巨大な石柱と二丁三メートルサイズの錨がぶつかり、轟音を立てる。

「俺達と手を組んでくれないか？」

「ハッ、殺人者と好き好んで手を組めつてか、笑わせるなよ」

「っ！ お前だってそうだろう！ 俺たちだって、好きで殺してたわけじゃ……」

「一緒だよ。戦争だから？ 力試しに？ そんなのは唯の免罪符に過ぎないね。殺した事は、罪だ。残念だが、俺は気絶させただけ、殺しちゃいないんだよ」

笑いながらそう話す。

犯罪者と一緒に居るつもりは無い。とても言うように。

「最終決戦ね。勝手に頑張れよ」

「頼む。お主が居れば心強い」

「テオドラ。俺は唯戦争を止める為だけにアレだけやったんだ。別に世界を救う為じゃ無い」

「じゃが、戦争を止めようとしたのなら、ここで世界を救わねば全てが水の泡じゃぞ？」

「……ソレもそうだな、骨折り損のくたびれ儲けだ」

ハハハハ、と自嘲気味に笑う。

「アスナ姫、か。……一緒に来るか？」

小さい、赤髪の少女はコクンと頷く。

「……俺も甘くなったな。こんな事するとは」

「アスナ姫を、どうするつもりだ？」

「おやあ？ 紅き翼のガトウか。ハハハッ、別にどうもしねえよ。唯の暇つぶしだ」

そして、世界の物語は紡がれる。

（後書き）

続かない。

このサイトのフィアンマとかアックアとかの能力持った転生者の小説読んだら無性に書きたくなったので書いてみた。時間が無かったので低クオリティですが。

正直ヴェントが使われない理由が良く分かった、戦いにならない。フィアンマも似たようなものだと思いますが。

ついでに言うを書いてる途中で大戦全部書いてると長すぎる、と思って飛ばし飛ばしのダイジェスト。予告っぽいですが続かないのでご注意を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9882u/>

魔法使いに天罰を

2011年7月23日07時17分発行